みんな磯辺の町で生きている
千葉県千葉市立磯辺第四小学校

1　体験活動の概要

４年生が、福祉体験（車椅子・ガイドヘルプ・点字・シニア体験）をしたり、障害のある人やお年寄りとの交流をしたりする。

2　単元名「みんな磯辺の町で生きている」4 年生　総合的な学習の時間

（1）　ねらい

福祉体験や障害のある人・お年寄りとの交流体験を通して、心の健康な子どもをめざして実践する。

本校で考えている心の健康な子どもは、次のような子どもである。

（自分に対して）

○　うれしい・楽しい・美しいなど感動する子ども
○　自分自身を大切にする子ども
○　自分から進んで、物事に取り組んでいく子ども

（人に対して)

○　友達や家族、周りの人を大切にする子ども
○　人の喜びや悲しみに共感できる子ども

（2）主な体験活動

総合的な学習の時間（３０時間扱い）

月	時間	体験活動の内容	活動の場所	活動の対象
6	３時間	ふれあいと体験の会 （点字。ガイドヘルプ・手話）	体育館	障害者のある人 1 名 ボランティアの人 2 名　保護者約２０名
7	１時間	ふれあい生き生きサロン（敬老会） 出演　リコーダー演奏	県営住宅集会所	お年寄り約 20 名
9	２時間	真砂・磯辺地区敬老会慶祝行事出演	コミュニティーセンタ	お年寄り約 20 名
	7 日間 ２時間	クラス全員が車椅子 1 日体験 （車椅子 5 台で 7 日間）	校内	
10	5 時間	「私の学校の好きなところ」を点字で紹介(いその子祭りに展示)	教室 体育館	
	2 時間 給食時間	「車椅子の生活について」お話を聞く	教室	障害のある子どもとその保護者
	4 時間	絵本の点訳（学校の図書室の本を 6 冊点訳）いその子祭りに展示		
	３時間	福祉新聞作り（点字・車椅子の生活・バリアフリーなど）班ごと		
11	2 時間 日常	親子シニア体験 シニア日常体験（半数ずつ）	体育館	保護者 28 名

2	６時間	2 分の１成人式 （１０年間を振り返ってみよう）	教室	関わった人

３　体験活動の実際

（１）　6 月 28 日　ふれあいと体験の会

○　活動の様子

本校のふれあいと体験の会は、平成 6 年度に親子学年活動として位置づけ、９年目になる。活動の内容としては、次のようなものである。

①　視覚障害者から、生活の様子やヘルプの仕方について聞く。

②　点字ボランティアの方から点字の仕方を教えてもらい、自分の名前や簡単な文章を書いて、視覚障害者に読んでもらう。

③　親子でペアーを組み、廊下や階段を一人がアイマスクをつけ、一人がヘルプをしながら歩く。

④ 最後に、手話ボランティアの方々から手話唱を教えてもらい、参加した全員で手話唱をする。

○　子どもの作文

・今日は、「なんで」と、たくさんたくさん思いました。まず、一つ目の「なんで」は、○○さん（視覚障害のある方）が先生のガイドヘルプがあったとはいえ、目が見えないのに初めての階段をよくスタスタと上り下りができるな。「なんで」というものでした。ぼくが目かくしして、お母さんがガイドヘルプをしてくれたとき、お母さんが「登りの階段があるよ。」と言っても、1 段登るのにとても時間が必要でした。

「気をつけて歩いてね」

・もう一つの「なんで」は、○○さんは目の見えない人なのに、目が見えるように見えたことです。・・・・・ぼくは「ふれあいと体験の会」に参加できたことをとってもうれしく思っています。

○　保護者の感想

・2 年前、上の子のときも○○さん（視覚障害者）に来ていただきました。そのときも、ガイドヘルプを体験しましたが、体育館から中庭へ出て、また戻ってくるという短いものでした。今回は、階段の上り下りをやってみてとても緊張しました。階段を踏み外さないようにするだけでも大変なのに、すぐ横を降りる人がいます。ぶつからないように、また、白杖で前の人をたたいてしまわないように注意しながら歩いて、体育館に戻ってきたときには汗をかいていました。

これで私も○○（子ども）も駅の階段などで白杖を持って上り下りしている人を見かけたら、声をかけずにはいられないと思います。「体験」がいかに大切かということだと思います。本を読んだり話として聞いたりするだけでは本当のことはわかりません。このような機会をこれからもずっと続けて欲しいです。

（２）敬老会へ　「リコーダー演奏・手話唱」で出演

○　活動の様子

①　７月１５日、県営住宅集会所（学校のすぐ裏）で「磯辺四丁目ふれあいいきいきサロン」(敬老会) が、行われた。この会に参加し、風車をプレゼントしたり、リコーダーで３曲演奏したりした。

②　９月８日、日曜日に真砂コミュニティーセンターで行われた「真砂・磯辺地区敬老会　慶祝行事」に参加し、リコーダー演奏した。また、ふれあいと体験の会で教えてえてもらった「一人の手」を手話唱した。

○　子どもの様子

真剣に聴いてくれるお年寄りの姿に、演奏する子どもたちもとても真剣であった。後日、子どもたちの中には「また、演奏したい。」と言っている子がたくさんいた。

○　お年寄りたちの様子

お年寄りたちはたちは、自分の孫をみるようなあたたかいまなざしで子どもたちの演奏する様子を聞いていた。終わったときには、にこやかな笑顔と拍手をおくってくれた。

（３）10 月 7 日　障害のある子とその母親に聞いてみよう

○　活動の様子

①　車椅子で毎日生活している○○君と母親に教室に来ていただき、○○君の家での生活や地域での生活で困っていることを聞く。また、アメリカのバリアフリーについての話を聞く。

②この日､給食を一緒に食べながらで困っていることや工夫していることを聞く。

○　○○君親子宛に出した子どもの手紙

わたしは､・・・・・。体に障害のある人ない人、みんな同じだと思いました。また、いろんなことを教えてください。

「食べ物は小さく切ります。」

（3）　親子シニア・日常体験

○　活動の様子

①　千葉市教育センターから、シニア体験用の道具（白内障用ゴーグル・利き手首おもり・両腕関節サポーター・膝サポーター・つえなど）を借りてくる。２グループに分かれ、２５分交代で擬似体験をする。子どもと親と装着物を交換して、シニア役と付き添い役を体験する。

② 親子シニア体験とは別に半分ずつのグループに分かれ、給食時間・昼休み・掃除の時間にもサポーター・白内障用ゴーグルをつけた体験をする。

○　子どもの感想

メガネとおもりをつけて・・初めは、少しいつもと違うだけで、おもしろいと思った。しばらくたつと、なんだか気持ちが悪くなって、いやになってきた。「取りたい。」と思ってしまう。それをがまんしているなんて、ぜったいにできないと思った。とくにつらかったのは、そうじの時でした。光でゴミがあまりよく見えませんでした。メガネをはずしたとき「色が見えることって、こんなにうれしいんだ。」と初めてわかりました。

○　保護者の感想

付き添いをしてくれて子どもたちの優しさもうれしく感じられました。

４　体験活動のための体制

（１）学校と関連団体や地域の人との連携

千葉市社会福祉協議会・敬老会・福祉ボランティア・ドリームの会・地域に住む障害のある方々、車椅子やインスタントシニア体験道具を貸していただく千葉市教育センター、千葉市美浜区役所福祉課の方々に協力をいただいて実践した。

（２）保護者との協力体制作り

体験によっては、体験の準備・片付けから運営のための援助をしていただいた。また、子どもと共通に体験する機会を設けたことで、より豊かなものになった。

おわりに

（１）成果

①　お年寄りや福祉に関わるさまざまな体験から、知識や観念ではなく、子どもの「感性を生かしてめざす子どもの姿に迫ることができた。特に、友だちや家族、周りの人を大切にする子どもの姿が学校生活の中で、数多く見られるようになってきた。

②　人とのかかわりを通した体験学習は、子どもの興味・関心や意欲を喚起したのみならず、今の自分を振り返り、子どもたちの生き方「こんな人になりたい」とまで、迫ることにもつながった。

③　長年の本校の福祉体験は、子どもたち・保護者・そして学校の大きな財産となってきた。昨年度までの実践の積み重ねが、今年度に生かされている。